

## 第2章 ユダヤ教はいかにして 組織制度偏重に陥ったか（1）

運動というのは その活発で力強い始まりの時期から一定のかなり明確な段階を経て進み、ついには 冷たくいのちのない形式主義で覆われるようになる傾向がある。それは一般的に、現状の誤りや悪弊、不正に反対する激しい反応として、その緊張が高まったときに生まれる。運動の支持者らはそれを 人々により良い方向を提示する望ましいことと考え、そうするのである。そうした運動は しながら、あからさまな敵意にみまわれ、現状擁護の者たちから非常な迫害を受けることが少なくない。通常、社会の多数派たる人々からである。権力者たちは、聖なる熱意とでも呼べるほどの熱心さで、かかる運動を踏み潰そうとする。社会が慣れ親しんできた価値観や生活様式を、運動が脅かすと恐れるからである。とはいえ、運動の参加者たちにとって 新たに知った理想や信念、価値観はかけがえのないものであり、それゆえ 彼らは、それらを 諦めるのでなく むしろ、迫害を甘んじて受ける者となる。

こうしたなか、運動が漸固たる敵対に抗して生き延びようとするなら、行き着くところ、自身の団体や機関を組織せざるをえなくなる。それは、2つの理由から必要になる。第一に、新たに見出した信念や価値観は運動の支持者らにとって実に 尊くあるため、他の人たちとも それらを分かち合いたいという熱い思いに駆られるからである。そして 第二は、自分たちの価値観を何らかの仕方で後の世代に受け渡す術を見つけねばならないからである。さもなければ、その運動は、最初の世代の死をもって消えゆくことになるだろう。ここでなんとも不思議なのは、草創のこの時期、運動の内部でさえ 平穏とは無縁なことである。実際、この時期に特徴的なのは、運動の信条や実践をめぐる、内部で異論が激しくぶつかり合い、鋭い論争が交わされることと言えよう。運動内にいまだ 同調を強いる権威者・権力者が一人もいないため、誰もが自由に考え、発言できるからである。

運動はその後、進展をするにつれ、好ましからざる一派とみなされ、自身が属するその社会から冷淡に扱われるようになる。この段階を特徴づけるのは運動に携わる側のひた向きな活動で、すでに勝ち得た現下の成果を確固たるものにするとともに、自らの立場への新たな賛同者を獲得しようとする。こうして、運動はかなりの速度で拡大を始めるようになる。それはとりわけ、社会的に虐げられた、恵まれない人々の間で顕著となる。

社会からの拒絶を経て 次に来るのが社会の忍耐・黙認で、運動はそこから、ついには社会による容認という段階に移り進む。この間、年月を経るなか、運動がある程度 社会に影響を及ぼす一方、社会もまた 運動に影響を与える。このため、両者の相違は今や、当初ほど大きくはない。運動はその後も精力的に活動を行ない、更なる発展を遂げるようになる。〔ここで留意すべきは〕<sup>(1)</sup> その運動はここに至り、単に社会に受容されるだけでなく、社会一般のものになるということである。そして このとき、それとは裏腹に、初期の運動に特徴的だった本質的な要求がそのトーンを弱めることにもなる。なぜなら、それらは応じるに容易なものでなく、一般大衆には受け入れがたいからである。

いずれにせよ、成功の味を知った運動のリーダーたちは こうして、ほとんどいかなる代価を払ってでも 自分らの「道 (way)」に人々を獲得せねば、と強く考えるようになる。そのようにして また、これを認め、これに参加するに至った支持者に対し、彼らに求められるところを教えて説明する取り組みも次第に展開されてくる。同時に、参加者たちのほうでも徐々に、運動への忠実度を示すと思われる 目に見える一定の有りようや活動を考え、それらに従う方向へと向かう。ただし、その一方で、運動当初の本質的な精神が時とともに失われてゆくのも事実である。

運動が一般社会に拡大するこの時期、その組織化と運営管理の効率化のため 明確に見られるようになるのが、権威や権力の集権化に向かう趨勢である。運動が大掛かりになり、その扱いが容易でなくなる。参加者の数が膨れ上がり、各地に散在するようになる。そして、その計画や活動が複雑さを増す。このため、計画を一つにまとめ、その活動を調整管理しようとするグループが現われるからである。運動の信念・信条は この時点で、より一様なものになる傾向がある。そして、一般に受け入れられる見解が勢いを得る。〔この段階では〕中央集権的な権威・権限はまだ形成されていないが、集団の圧力が少なからず存在し、関係者に同調を求め、これを促す。それに従いたくない者はたしかに、本人が願えば、自身の思うとおりに自由にできはするものの、自分が周辺に追いやられていることを、微妙な仕方で、しかしはっきりと知らされることになる。このように、個々人に対してもグループそのものに対しても 圧力には極めて強いものがあり、是認されたやり方とその実践に従うよう作用するのである。加えて、運動には今やすでに 長く誇るべき伝統が備わっており、それがこうした実践を後押しするものともなる。

運動がこれらの段階の一々に留まる期間はどれほどなのか。数年単位か、十年単位か、それとも百年のそれにもなるのか。それは、幾つもの かつ複雑な要因によって決まる。しかも、こうした段階は明確に識別できるとはかぎらない。運動のどの時期を取っても、幾つか異なる段階のしるしが混在しているかもしれない。運動は、すべての面が揃って一律に進むわけではないからである。実際、集団の圧力は、自由を堅持せんとする激しい取り組みと相争うことになろう。集約され固定化されんとした信条も、それに対する活発な調査検討を受け、その実態が露わになる。このように、参加者の多くは決められた段取りに従い、なすべきことを形式的に行なっているだけとはいえ、熱意と精神の両方において 初期のリーダーたちのそれらを実践する人たちもまた、そこにはいるにちがいない。

こうして、我々は最終的に、運動の最後の段階へと至る。ここにおいて、信条は教条に集約されて固定化され、その受け入れを要求するものとなる。ここに至り、個人もしくはグループに 権威・権限が付与され、従順を強要する力を持つようになる。異を唱える者は、投獄か死刑のいずれかをもって撲滅されねばならない。その誤った教えが人々を「真理 (truth)」から離れさせるやもしれず、彼らを過ちから守るのが当局者の責務とされるからである。人々に期待されるのは運動の方針に同意し、その具体的活動に従うことである。そこでは、同調がゴールとなる。人々はそのようにして、見た目にはなおも 事をこなしてはいく、時に活発に、献身的に。だが、その精神が失われるのである。冷たくいのちのない形式主義で覆われるようになった運動。組織制度偏重主義の姿である。

しかしまた このとき、新たな運動が生まれ、これらの枷<sup>かせ</sup>を打破するにちがいない。新たな理念、新たな信念・信条、新たな価値観、新たな方向性を持った運動が。そのとき、時の権力者らが再び、あらゆる手段を用いて これに圧力をかけ、これを迫害し、現状を脅かす者たちを踏み潰そうとするであろう。だが、こうして、一連のサイクルがまた 新たに始まるのである。こうして、新たな運動が起きてきたのである。

## 歴史から学ぶ

現下の運動を理解し、その実態を吟味し、その影響を評価しようする場合、常に、その歴史的背景に照らしてそうしなければならない。一人の人の短い生涯における限られた観察で運動の全体像を完全に得るのは不可能と言える。時の運動との距離が近すぎ、専<sup>もっぱ</sup>ら個人的経験によらざるをえない事柄で色濃くされてしまうのが常だからである。運動は、現在との関係だけでなく、過去との関係においても見なければならない。個々人が人類の経験を訪ねてそこに赴かねばならないのもその故で、そうすることで 不十分かつ不完全な知識を広げ、現在をより適切に分析・評価しうる観点を、基準を、またその術<sup>すべ</sup>を得るのである。実際、人類が経験を続けるなか、そこには絶えず 新たな要素が現われもするが、しかしそれでも、基本的諸問題の多くは 先の世代が直面してきた問題なのだ。

哲学者のジョージ・サンタヤーナ (George Santayana) <sup>(2)</sup> は次のように言っている。「歴史を知らぬ国は、それを繰り返す宿命にある」。<sup>1</sup> 事は信仰のグループやその教派においても真実で、キリスト教の歴史に疎く、そこから学ぶことをしないそれらは 同様に、その歴史を繰り返す宿命にある。宗教的な運動といえども、組織制度偏重への趨勢は免れないからである。事実、歴史を振り返るとき、我々はそこに、そうした危険性を知らせる例を見ることができる。

〔以下に論じる〕3つの主要な信仰の運動は 当初、生き生きとした経験的性格の信仰を特徴としたが、しかし、そのいずれもがそこで起きていることに気づかぬまま、お決まりの段階を経て、組織制度偏重の姿になっていった。第一のそれはユダヤ教で、エズラの活動と〔バビロン〕捕囚からのユダヤ人帰還に始まり、イエスが地上で働かれたその間 厳しく非難されたファリサイ主義（パリサイ主義）に至るまでの時期である。第二は、イエスの時代から ローマカトリックが発展を遂げた中世に至る時期のキリスト教である。そして第三は、マルティン・ルターの宗教改革から イングランドとヨーロッパ大陸における国教会にまで至る期間がそれである。これら三つの運動について、以下、それぞれの歴史的推移を簡潔に辿<sup>たど</sup>ることにする。そこでは上記の基本的パターンに合致しない事柄も目に留<sup>と</sup>まるが、紙幅の関係で それらの一々に触れることはできない。が いずれにせよ、基本的なパターンはまさに、どの時期にも現出するのである。その変化がいかにして生じたか、我々はそれを見ることで おそらくは、ある一定の原理原則や洞察を見出せるのではないか。今日のキリスト教の現状分析をより客観的かつ厳密なものにするそれらが、と思われる。<sup>2</sup>

## 組織制度 発達す

〔第一のユダヤ教について見てみよう。〕イエス時代のファリサイ主義（パリサイ主義）を理解するため、ユダヤ人がバビロン捕囚から帰還したその時にまで戻る必要がある。ユダヤ教の本質はその律法主義的体系にあり、それはイエスの時代のみならず今日まで続いているが、これを決定づけた端緒がそこに見出せるからである。<sup>3</sup>紀元前586年、エルサレムが陥落。これをもって、国家体制としてのユダヤ人の国は滅亡するところとなった。このとき、民族の独自性を保持する手段として残ったのは唯一、宗教だけだった。ところが、バビロンで捕囚生活をおくるなか、父祖らの信仰も伝統も捨て、そこでの商いに心を奪われていく者たちも少なくなかった。しかしまた、その一方である。捕囚の苦しみと困難の内に、神の懲らしめの御手を見る人たちもいた。律法に従順でなかったがゆえ、神がそれを我らの上に置かれたのだ、と。彼らはこうして、その不従順を心から悔い改め、新たな献身をもって、モーセの律法に心を向け直したのだった。これら、自らの罪を認め、それを悔い改めた捕囚の人々について、H. グレーツ（H. Graetz）<sup>(3)</sup> はさらに次のように述べている。

あ 悪しき道を絶った者たちは、今度は、自らが他の人々を回心させる者となった。かつての罪人らが、悪しきを行なう他の者たちに神への道を教え示したのである。こうして、信仰に熱い人たちの数が、すなわち「神の言葉を熱心に求める人たち」「神を尋ね求める」人たちの数が次第に増していった。<sup>4</sup>

新たな動きが生まれたのである。

捕囚から帰還した人々は心を新たにし、アブラハム、イサク、ヤコブの神への献身をいま一度言明した。そして、この新たな動きに勢いと方向性を与えたのが、祭司であり律法の学者でもあったエズラだった。律法を守り、祭礼や断食、犠牲の献げ物など、そこに定められたすべての務めを果たすこと。エズラはこれを、人々の生活の最重要事としたのだった。もちろん、律法は形式的に守るべきものではなかった。そうではなく、律法というそのところにおいて人々がなすべきは、そこで神の御心を見出し、それに従うことだった。しかしながら、エズラのこの律法主義的運動の内にすでに、律法の文言を外面的・表面的に順守するだけのその種が蒔かれていたと言える。これが、イエスの時代のファリサイ主義（パリサイ主義）に至って、その全盛を迎えることになるのである。こうして、手段が目的となっていくようになる。

（続く）

## 注

1. Quoted in Edith Hamilton, "History's Great Challenge to Our Civilization," *Reader's Digest* (March, 1959): 160.

2. これは、循環的な歴史観の提唱と理解すべきものではない。聖書の歴史観は、循環的というより、むしろ直線的である。聖書の神は歴史において、御自身のゴールへとその歩を進められる。ここで言わんとしているのはただ、次のようなことである。すなわち、その活動を組織化して行なうとき、

信仰の運動ととも、活力溢れる生き生きとした時期から、続く諸段階を経て、ついにはいのちのない形式主義のそれへと移行する趨勢がある、ということである。

3. Meyer Waxman, *A History of Jewish Literature from the Close of the Bible to Our Own Days* (New York: Bloch Publishing Co., Inc., 1930) I: 45.

4. H. Graetz, *History of the Jews* (Philadelphia: The Jewish Publication Society of America, 1891) 337.

### 訳注

(1) [ ] 書きは、訳者の補筆挿入。

(2) スペイン生まれの アメリカの哲学者、批評家、詩人。1863～1952 年。元・ハーバード大学教授。批判的実在論の代表者として活躍した。後半生は、アメリカを離れ、ヨーロッパで活動。

(3) ユダヤ人の歴史家で、ユダヤ史をユダヤ的視点から包括的に著した最初の学者の一人。1817～1891 年。19 世紀ドイツにおけるユダヤ学の代表的学者として活躍した。

(矢野 眞実訳)